＜追悼・西澤正樹先生＞

好漢・西澤正樹先生の死を悼む

鯉渕 信一（亜細亜大学元学長）

まことに西澤先生は「好漢」と呼ぶに相応しい方だった。溌剌として何事にも前向きで、人情味にあふれ、人との交わりを好み、誰に対しても分け隔てなく接し、それでいてご自身には厳しい姿勢を貫き通した。長野の大町育ちで子供の頃から自然に親しんでいたことからか山歩きやスキーがお好きだった。とりわけ野営での焚火の楽しさ語る時の目は子供のように輝いていた。傍にいてそのお人柄は実に心地良いものだった。

私は亜細亜大学の職を辞して12年余りになるが、その後もずっと先生とは定期的に酒を酌み交わしては愉快な時間を過ごしてきた。退職後も年に二度ほど大学で講義があり、それが終わると武蔵境駅前の中華料理店にアジア研究所や「夢カレッジ」の仲間が集って楽しい飲み会になった。そこにはいつも先生がおられ、きっと隣に座って夢カレッジの現状や将来、ご自身の研究などについて熱っぽく語ってくれた。そうしたことが楽しくて退職後もずっと講義を続けていた。

ところがコロナ禍でその飲み会がストップしてしまい、しばらく先生とお会いできずにいたが、今年３月末に突然、先生から「大学を退職しました」というメールが届いた。まだ定年には早いと思ったので、どうされたかとご本人に訊ねたがご返事がなく心配していると、「体調を崩してのこと」と周辺から漏れ聞こえてきた。一方で、すぐにも回復されそうだという話も耳にして安心していた。そこに飛び込んできた突然の訃報、元気に語りかけてくる先生の笑顔が浮かび、その余りに早い死に愕然とし、信じられない思いであった。今もあの屈託のない笑顔で、しきりに語りかけてくる先生の姿が私の脳裏から離れない。

先生は2004年４月、日本と東アジアの産業地域間交流、中堅企業の振興研究という専門分野を引っ提げて亜細亜大学アジア研究所の准教授に就任された。しばらくして後述するさまざまな研究と教育実績が評価されて教授に昇格された。

その３年ほど前に学長に就任した私は大学の将来の進むべき方向を模索した。そして「日本とアジアの架け橋」たらんとする夢を抱き、実現しようとする学生を育成することに方向を定め、教職員有志と２年余りの歳月をかけて検討に検討を重ねて「夢カレッジ＝キャリア開発中国プログラム」なるものを立ち上げた。単なる机上の教育にとどまらず、企業と連携し、留学やインターンシップなど現場教育に重きを置いてリアルな中国社会を学ばせようというものだが、しかしそれを実施するには一つの難題があった。アジアを体験的に理解し、産業現場を熟知し、学生と企業を結びつけ、そして何より教育に情熱を傾けられる人材がどうしても不可欠だった。しかしそうした人材は学内外を見渡しても既存の大学組織には容易に見いだせなかった。情報を集め、八方探し回ってようやく辿りついたのが西澤先生だったのである。

先生はご自身で研究所を立ち上げ、厚労省の専門委員として中堅企業の育成、地方経済の振興、あるいは行政と企業間の連繋に関わるなど幅広い実務経験をお持ちだった。「夢カレッジ」の柱である協賛企業や中国におけるインターンシップ先の開拓や連繋、コア科目の担当者としてこれ以上は望むべくもない適任者だった。大学への正式着任の１年も前からプログラムに参加していただき、幅広い人脈を活かして協賛企業やインターンシップ先の拡大に尽力していただいた。その結果、それまで容易に進まなかった企業との連携が一気に進み、プログラムの進展に弾みがついた。

授業は１年生から４年生までの全てのゼミ、「現代アジアとキャリアデザイン」、「海外ビジネス・インターンシップ」などの主要科目を担当されたが、とりわけプログラムの要である企業との連携に果たした先生の功績は実に大きかった。毎年、学生は大連への留学前に諏訪、日立、相模原などの地方都市で泊まり込みの企業研修を行なったが、それらの市の商工会議所は先生の密接な交流先であり、それによってスムーズな研修が実現したのである。こうした国内での企業連繋のみならず、学生の留学先である中国・大連外国語学院や中国でのインターンシップ受け入れ企業などとの連絡調整にも先生は持ち前の果敢な突破力と調整力を発揮してくれた。先生なくしてこうした企業と連携した教育プログラムの実現は困難だったといって過言ではない。

学生指導にも情熱を傾けて取り組んでおられた。日常の学習指導はもとより、授業を離れても学生と正面から向き合って何くれとなく面倒を見ておられた。中国でのインターンシップ先を割り振るにしても学生一人ひとり

の将来の志望、性格までしっかり把握したうえで決定し、さらにインターンシップ中、そして終了後も常に目配りをして懇切に指導に当たられていた姿が強く印象に残っている。こうした先生の姿勢が、学生はもとより企業側の信頼を高めてプログラムを成功に繋げていったのだと思う。

先生の逝去後、ある卒業生は「学生自身がうまく言葉にさえならない、どんな問題を投げかけても上手に拾ってくれ、学生自身がまとめきれない思考すらも整理してアドバイス下さった」と述懐し、「幽霊でもいいから、人生の節目に先生のアドバイスが欲しい」とすがるような言葉を送って来た。また別の卒業生は「先生は学生を決して突き放さない、かといってすごく近づいても来ない。しかしドアはいつも開いていて何事にも親身に相談に乗って下さった。野に咲く草花のように、いつも自然体でどの学生にも接しておられた」と先生の印象を語ってくれた。

放課後、何人かの学生が連れだって先生の研究室にニコニコ顔で入って行くのを何度も目にした。研究室の冷蔵庫にあったビールもお目当てだったようだが、ある卒業生は先生の傍らで長居するのが嬉しくて、あえて容易に決着をみない、しかし夢カレ生らしい中国経済や日中間の歴史問題、将来の生き方などのテーマを抱えて研究室のドアを叩いたという。時には終電間近になっても話が尽きずに先生のお宅にまでお邪魔したという。懐の広い先生の傍で談笑するのがよほど心地良かったのであろう。学生たちの笑顔が浮かんでくる。

研究面で際立っていたのは、机上での研究のみならず、実際に現場に足繁く通って問題点を掘り起こし、単に状況を把握してペーパーで報告するということではなく解決策までを提示するという一貫した姿勢だった。それは国内ばかりでなく、中国の四川省、雲南省、黒竜江省、内蒙古自治区、新疆ウイグル自治区などの中国の地方都市、さらにはモンゴル国にまで及んだのである。日本人研究者がほとんど顧みることのないこれら地域の研究は、その研究手法と相まってまさに西澤先生らしいものだったといえる。先生の逝去を知った日本駐在のモンゴル国商工会議所代表が、「西澤先生はモンゴル国の中小企業振興に向けてさまざまな貴重な提言を下さった。まだまだ教えを乞いたかったのに悲しみに耐えません」と私にメールを送ってきた。西澤先生がこんなところにまで交流の輪を広げていたことを知って驚いた。

先生との思い出はいろいろあるが、大学の教員仲間が集って各国料理を食べ歩いたこともその一つだ。インドネシア、韓国、中国、インド、モンゴルなどを専門とする教員が月に一度のペースでそれぞれのお国自慢の料理店を紹介し合うというもので、いつも食の話から民族や文化にまで話題が際限なく広がり、実に愉快な時間だった。これを企画し推進したのが西澤先生だった。集まった何人かは先生とは分野も所属も異なっていて、どこに接点があったのか不思議な思いに駆られたことを覚えている。その繋がりを先生に訊ねることはしなかったが、人との交わりを大切にされ、自ら積極的に交わりを築いていく術を身につけた先生の真髄を見た思いがした。

西澤先生が逝かれて、もう二度とあの温容に接することができなくなったのだと、悲嘆のうちに何度自分に言い聞かせたことか。モンゴル草原の満天の星空の下で焚火を囲んで羊肉を食べる約束も、私が通う伊豆の海に一緒に釣行して焚火で釣った魚を食べる約束も果たせずじまいだった。中華料理店の飲み会で熱っぽく語りかける先生の明るい声はもう聞けない。残念、無念の思いで一杯だ。

しかし今、私どもには明るく、人情味に溢れた先生の思い出が残された。その思い出は容易に忘れ去られるものではなく、心の奥にあざやかに生きて幽冥境をへだつとも、いつまでも繋がる思いを覚えずにはいられない。今はただご冥福を祈るや切である。

好漢・西澤正樹先生の笑顔が脳裏をめぐる余韻の中で。

合掌